

から特に激しく上下する。気温は高く船室は蒸々とする。船員等は白い夏服に着換へて清々しい。豫定より遅れ、午後六時に鳥島着。天候良ろしからず、船長は上陸を促さず、歸航を期待して上陸を断念した。荒れ気味の暗について直に出船。(十二月四日)

今日父島着の豫定であるが、強い向ひ風に船の歩みは遅々として進まない。既に動搖には慣れたやうで、入浴し汗を流す気分、また爽やかである。

船が父島の二見港に入つたのは既に夜の十二時に近かつた。港の灯點々と静かな港内の水に映じてゐる。甲板に出ると涼風肌をなで、恰も夏宵の涼みと云ふ感である。上陸せず、今夜も蒸暑い船室に寝ることにした。(十二月五日)

朝九時頃船を下りて海際の南陽館と云ふ宿に入る。宿は波止場に面してゐるが蒼々と茂る熱帯樹が圍んで、直接の海風を遮つてゐる。海の香、にぶい發動機の音、椰子の葉の揺るぎ、しばし前に別れた今年の夏と、いくばくも経ず、また再び巡り會つたやうな氣がする。街を歩くと、唯眼につくのは種々の樹々、クロテツ、ガジユマル、ヤシ、パパヤ等。何だか物足りぬやうな氣が

すると思ふと、スズメの居ないのに氣がつく。北原白秋氏が、雀の姿が見えず、ヲガサハラウグヒスの聲にのみ悩まされたと云ふ「雀の生活」の中で讀んだことをなるほどと想ひ出した。

黄色い小粒のキングバナナやパパヤ等を賣る店、珊瑚細工をする家等、一寸田舎の宿場然として軒を並べてゐる。スズメの居ないこの島では先づボニンメジロが眼につく。午後要塞司令部へ撮影許可證をもらひに行き、又警察署へ寄り採集の了解を得た。ザワ／＼樹葉がなる。併し蒸暑い。夜は久しぶりで蚊帳を吊つて寝た。(十二月六日)

磯の香をかきながら海邊を傳つて奥村から扇浦へ向ふ。海岸はモモタマナやテリハノボク等と云ふ大きな葉の熱帯樹が鬱蒼と茂り、樹々の間をひとり歩くのは何とも云へない位、清々しい氣持ちがした。メジロが非常に多い。

ヲガサハラヒヨドリは山手に多く居るが、普通のヒヨドリに比べて非常に黒つぽく見える。ヲガサハラウグヒスは畑の側、道端の茂み等で笹鳴きをしてゐる。ある流れで越冬に来てゐるところの、ササゴキ、オホヨシゴキ、アヲサギ等を見た。

歸路につくうち漸く天候變り、奥村附近迄來ると暴風雨に變る。さすがは大洋の中らしいこと

だと思つたが、来た早々念の入りにすぎた接待ぶりである。宿に入つても家が倒れるのかと案じられる位だが、土地の人は始終あることとて、一向氣にもしないらしい。(十二月七日)

昨夜の暴風雨は止み、麗らかな朝である。朝のうちに屏風谷へ行く。この邊に野生してゐる山羊の撮影をする。恰も山で見る羚羊カモシカも斯くやと思はれるもので、非常に用心深く、接近することは殆ど不可能、遠く谷を挟んで一方の山腹から望遠レンズで辛うじてカメラに収めた。午後は奥村のセボレー氏の家で放飼にしてゐるオホアジサシを撮影した。(十二月八日)

旭山へ行く。旭山は奥村に面した斷崖の奥、ある岩棚にノスリの巢があつた。勿論今は蕃殖時期では無いので舊巢であるが、之は毎年使用して育雛するさうである。夕方、ジョー君が飼つてゐるよく慣れたヲサドリ(カツヲドリ)を撮らしてもらつた。(十二月九日)

今日は早朝からカヌーを出してもらつて兄島へ行く。海は漸く風ぎ、音も無き静けさである。兄島は父島の北、僅かに海峡を距てて相對してゐる。タコノキの茂るタマナビーチから上り、山

へ登る。ヲガサハラヒヨドリ、ウグヒスが頗る多い。中食は海岸の砂上で、捕りたての魚を刺身にし、又カワハギの一尾を焚火に入れてその儘焼くと、厚い皮は黒々と焦げるが、中味は程よく蒸焼きになつてゐた。シヤコの貝殻でくみ交はす糖酒の味。忘れ得ぬ想ひ出だ。(十二月十日)

午後から屏風谷の方へ採集に行く。岩上に美しい姿のイソヒヨを見る。非常に多い。奥村の人は「ブルーバード」と呼んでゐる。其他、砂州に下りたムナグロ數羽を見た。(十二月十一日)

良く晴れてはゐるが、時折激しい驟雨スコールが来る。今日は數日來の疲勞を癒すべく、奥村で遊ぶ。奥村の娘、ブラッサムが来て私に云ふ。

「寫眞を撮つてくれないか、オレンヂやるぞ！」

此の「野生の花」は頗るぞんざいな言葉つきである。

ブラッサムの家の庭には、アメリカの南部から來たと云ふオレンヂの木が一本ある。島在來のオレンヂより、味もよく香りも豊かださうだ。

「幾つくれる？」

「澤山はやらないよ、もつと欲しけりあ、あんた買ひなさい」と。
村の人達は夕焼をした空を見て、どうも又吹きさうだと不安らしく云ひ合ふ。明日に迫つた聳島行きが氣づかはれる。(十二月十三日)

果して暴風、勿論船は出ず。(十二月十四日)

風は止んだが、港外は波で到底駄目であると、今日も中止。(十二月十五日)

朝九時船が出ると云ふ。船と云つても全く頼りない船だ。古い小さな和船に發動機を取り付けたもので、艦の方に稍斜にかしいだ錆だらけの煙突も寂しく見える。勿論室も無く、私たちは船の板張りの上に寝そべつてゐるより他になかつた。ウキリーと村田氏が同行。

港外の波は未だ激しい。船は殆ど逆立つやうになり波を乗り切つて進んだ。途中に並ぶ列島は兄島、弟島、嫁島、媒島、針ノ岩と續き、一番北のはづれが聳島である。此島は又ケータ島とも云ひ、父島を北へ約××料餘、午後六時頃になつて着く。

島はゆるやかな丘陵になつてゐて、所々タコノキやビロウ等の茂みがある外には、すべて草のスロープである。丁度眞南に當るところに小さな灣があつて、人家はその附近に、漁村と云へる程のものでは無く、四、五軒は漁夫の宿舎で、もう一軒はこの島のすべてを監理してゐる岩崎氏の住みである。父島を僅かに××料の北方であるが、父島より温度は稍と低いやうに思はれた。之は氣のせぬだとはかりは云へないやうで、薄着のウキリーは唇の色を變へてガタ／＼と齒を鳴らしてゐた。

水平線上へ近づいた太陽の斜光を氣持良く浴びて草原を歩いて見た。ムナグロ、キヤウジョシギ、キアシシギ等バラ／＼と草の中から飛び出す。この鳥たちは多分此處で一夜を明かすのであらう。或は一と冬を越すのかも知れない。草の丘に、昔沼池であつたと云ふ凹所が未だおぼろ氣ながら古^{いにしへ}の面影を語つてゐる。今は既に絶滅したハシブトゴキのありし日は、斯様な所で生活をしてゐたのであらう。沼の消失と共に地球上から姿を消したと云ふこの鳥の姿が幻の様に私の頭に浮んで來た。

タコノキの茂みの中で、私が初めてメグロを見たのも此時であつた。

此島では勿論宿屋は無く、岩崎氏の家に御厄介になることにした。(十二月十五日)

此島へ来た目的はメグロを観るばかりでなく、鴛島の直ぐ側に在る北之島へ行く目的であった。此小島には少数ではあるが、アハウドリとクロアシアハウドリが蕃殖してゐるのだ。往航の折、期待してゐた鳥島への上陸が出来なかつたので、せめても此島位はと、ひそかに確信を持つてゐたのである。

朝になつたが海は餘り穏かでない。時折篠をつくやうな驟雨スコールが来る。雨具の無い私たちは大きな檳榔葉を手折つて頭上にかざす。この天候では到底駄目ですよと云はれて私はがっかりした。行くには行けても船つきの悪いあの島では上陸不可能だと。丘陵の一角に立つて、約六軒の沖に在る北之島の方を眺めると、なる程島の周囲は白く泡立つてゐる。

島と云へない程のもので、大きな岩礁上に僅かな草地があり、此處がアハウドリの營巢場である。數組のアハウドリの白い姿が、之も僅かなクロアシの中に混つてポツ／＼と泡ぶくのやうに見える。眼前に見えてゐてその場へ行けぬのは一入の口惜しさである。

又天候が變りさうだと、船頭にしきりと促がされて末だ十時と云ふのにしぶ／＼と歸航についた。昨日より波は高いが追ひ波で、船はピッチングは少ない代りに激しいローリングである。仰向けに寝てゐる上を悠々と飛ぶラサドリ、あわててカメラを用意する間もなく飛び去る。夕刻五

時頃父島着。(十二月十六日)

終日歩き廻つたが餘り獲物なし。夕方ザトウクヂラの解体を見た。(十二月十七日)

今迄硫黄島イワジマ方面へ行つてゐた芝罘丸は今日入港の豫定。それで明日の出帆も餘儀なくされた。要塞司令部へ行き許可證を返納。セボレーの家では私への土産を入れる籠を、檳榔葉で編んで造つてゐる。土産物は、パパヤ、貝、カヌーのモデル等。(十二月十八日)

夜來の雨止まず。朝九時豪雨中を乗船、十一時半頃出帆、雨の爲に海上は割に穏かである。

(十二月十九日)

今朝中に鳥島着の豫定なので早朝ベッドを離れた。雨は降りやまず、漸時風さへ出て、又上陸が氣づかされる。正午過ぎ、鳥島に着いたが、風雨のため遂に上陸は斷念する。噴火して末だ時經ぬ此島は、灰黒色の地肌をその儘に、山上に重く垂れた雨雲の色に和して凄慘な氣持ちさへす

る。出帆後烈風益々加はる。(十二月二十日)

暴風の氣味。海上は不規則な波の山。船の動搖激しく、ベッドに入つた儘起きることが苦痛である。日没と共に風稍々静まる。午後七時半、八丈島大賀郷着、今夜は上陸して宿に入る。

(十二月二十一日)

早朝からアカコッコの觀察に過す。陽はうららか、疲勞多い體はしきりに睡氣を催す。夕刻出帆、漸く寒さを感じて來た。(十二月二十二日)

小笠原島のメジロ と ウグヒス

先づ見た鳥はメジロであつた。又時季が春の頃であれば四邊の山々から、メジロの高音にまちるウグヒスの聲が耳に入るであらう。小笠原島産のウグヒスは内地産の亞種で、ヲガサハラウグヒスの名稱を持つてゐる。メジロは伊豆七島に産するシチトウメジロとよく似たメジロで、最近の日本鳥類目録にもシチトウメジロとなつてゐるが、此島の鳥を永らく研究された靱山徳太郎氏

はボニンメジロとして前者と區別されてゐる。私は分類をやるのではないから細かい差別點は知らないが、ある日當の靱山氏にボニンメジロに就いてお話を聞く機會を得たのであつた。

元來、小笠原島にはメジロは産しなかつた。小笠原島より更に南の硫黄島は富士火山系の新島で、小笠原島とは成因を異にしてゐるが、此島には以前からイワウジマメジロが棲息してゐた。今は小笠原島では父島と母島にだけメジロが棲むやうになつたが、之は二、三十年來のもので其當時から急に現れ、増産したものださうである。それは八丈島から來た移住者が飼鳥として齎したシチトウメジロと、又硫黄島からやはり飼鳥として移入されたイワウジマメジロが偶々逃れて、兩種が交雜して出來たもので、ボニンメジロは兩種の中間形であると言ふ。

營巢時期は三月から五月、私は翌年の五月半、再度の渡島の折には、卵と、孵化したこの雛を澤山見ることが出來た。その巢は庭園や、山地のゴムノキの枝によく見られた。全くの纖維ばかりになつた樹葉を外部に綴つてゐるのは、複雑なレース細工のやうで、全く美しい藝術品を見るやうな感じがした。

ウグヒスの亞種であるヲガサハラウグヒスは、形態も生活狀態も内地のウグヒスに大差は無い。鳴きの音色は稍々劣ると云はれるが、私は山野を歩き、常に疲勞した心身を慰撫されること

が充分に感じられる程の美しい聲であつた。

此島には竹藪と云ふものは割に少ないが、僅かに人家附近や低い山の斜面等にあつて、やはりウグヒスはこの場所をよく選んで営巢するのである。併し巢は比較的高い箇所に営み、ある例では地上五米程の竹の梢に造られたものがあつて、教へられてもあれがウグヒスの巢であるとは考へられない程であつた。竹以外によく潤葉樹の枝を選んでゐる。そんな樹木に、巢材は笹葉を用ひて営巢してゐるので、之も見慣れぬ眼には一寸異様な感があつた。

メ グ ロ

私の聳島に於けるメグロの印象は甚だ淺薄なものである。十二月十五日、父島から聳島へ渡つたその日の夕方、タコノキの密生してゐるある谷間で僅かに片影を認めた。動作はメジロに大差ないので、鳴きもメジロをすつと太くした聲で「チー チー」と鳴いたが、これもほんの僅か、辛うじて私の耳に残つてゐて餘りはつきりしない。もう少し見ようと思つてゐる矢先、案内をする漁師の一人が、持たしてあつた九ミリの銃をパンと撃つて、淡い煙の跡にはその鳥の姿は地上に落ちてゐた。未だ生温い死鳥を手にとつて見ると、メジロに似ては居るがすつと大きく、

色も黄色と黒味を加へた色で、眼元の黒斑が鮮やかである。

島の人の話では、タコノキの實を割つた跡には必ずやつて来て、こぼれ落ちた實のかけらを拾ふさうで、之を餌にして伏せ鼠を利用すれば幾らでも捕れると云ふ。タコノキの實と云ふのは、外見は一寸パイナップルの實に似てゐて、熟したものは美しいオレンジ色を呈して、堅い外殻を割ると、中に胡桃の芯のやうなものが入つてゐる。稍々脂肪氣があり、殊にその香は佳く、之も一寸パイナップルに似た香である。タコノキの實は、鼠やラガサハラオホコウモリがよく嚙つて食べてゐる。メグロも之を特に好むやうであるが、自然の儘の状態ではメグロ自身が此の堅い實を啄んで中味を食べることは出来ないだらう。

蕃殖時期は五月中下旬、クロテツ等の枝に椀状の巢を、タコノキやビロウの纖維を主材にして造る。卵は一腹二箇を産むのが普通で、山階侯爵の所藏される標本に依ると淡い緑青色の地に褐色の斑点がある美しい卵ださうである。私が聳島に行つた時は、既に尠くなつてゐたが、其後同島の岩崎氏からの報せでは鼠害の爲にもう殆ど絶滅に近いと云ふことであつた。以前鼠は此島には居なかつたが船の出入が頻繁になるにつれて、段々多くなつて來たさうである。何れにしてもラガサハラマシコやラガサハラガビテウ、ハシブトゴキと同じ徑路を辿つて地球上から姿を消す

べき運命にあるメグロにとつては惜しいことである。

メグロは父島に棲まず、母島には未だ可成り多い。今迄に父島へ移殖を試みたが何回やつても駄目であつたと云ふ。之はやはり山林の尠い父島には不適當であるらしい。母島のは聳島のメグロと亞種が異なりハハジマメグロと名稱されてゐる。

海鳥の放飼

父島や母島の漁師はよく、オホアジサシやヲサドリを飼つてゐるものがある。父島の漁師ジョーの飼つてゐるヲサドリはよく慣れてゐた。不斷は家の裏庭に紐でくゝつてあるが、ジョーがカヌーに乗つて漁に行くときは紐をほどいて連れて行く。

父島の沖で白い帆を上げたカヌーの上を、船と前後して飛ぶそのヲサドリの姿を見たことがある。ヲサドリは此附近では父島の少し南にある南島に蕃殖してゐて、ジョーのブービー(ブービーとはヲサドリのことであるが、ジョーは此島の固有名詞にしてゐた)も南島産である。

スワニーと云ふ子供が飼つてゐたオホアジサシはジョーのブービーよりよく慣れてゐる珍しい鳥であつた。之は全くの放飼で、いつもスワニーの家の萱葺き屋根の一角に止まつてゐた。スワ

ニーは此鳥を「ツー」と呼んでゐた。「ツー」とはオホアジサシの方言「ツバ」の略稱である。遠くから呼ぶスワニーの聲に答へて、「クワツ クワツ」と鳴いてスワニーの姿を追ふ。スワニーは手製の魚扱もりで海の浅瀬へ来る鰯いわしについては「ツー」に與へてゐた。又スワニーの親たちが沖の漁から歸つて来る夕方は「ツー」の嬉しい食事の時間だ。井戸端でおろされる魚の臍物は「ツー」のよき食物である。

これ程可愛がられて居た「ツー」もその後海邊で遊んでゐるところを、誰かに棒ではたかれて死んださうである。後で此鳥の剥皮をもらつたが、此鳥は西之島の産である。オホアジサシは此附近では西之島だけに蕃殖してゐる。

西之島のことども

西之島は父島から西方×××の孤島で周囲×××米餘であるから之も島と云ふより殆ど岩礁に近い存在である。勿論人は棲まず、大洋中の平坦な小島であるため航海者も中々発見し難い島なのだ。數十年前、此處に多産したアハウドリの羽毛採取の人達が幾年かを過したが、迎への船の來航が遅れて皆アハウドリ

の死體と共に白骨になつてしまつたと云ふ哀れな話がある。

島中、水の出る所としては全然無く、又他に之と云ふ産物も無いために世人に顧られることなく、島は渺茫たる洋中に忽然と浮んでゐるのである。併し海鳥には好個の蕃殖地であつて、蕃殖時代に偶々附近を航する鰹船等が時折立寄ることがあり、その模様を聴くと、全島は恰も雲に包まれたやうな鳥影であると云ふ。

その大部分はオホアジサシで、其他「南洋ガラス」と稱するクロアジサシ、奥村の人は之を「ウィル ウィル」即ち「Well Well」と呼ぶが、之はクロアジサシの鳴き聲がかう聴かれるからである。其他ヲナガミヅナギドリ、ヲサドリ、アナドリ等産するが、往時多かつたアハウドリは今は非常に少くなつたさうで、之は全く前記の羽毛採取で濫獲された結果である。此鳥の他、オホアジサシは更に上等の羽毛とされ、ヲナガミヅナギドリやアナドリも、羽毛を採る目的で捕獲されてゐるところを見ると、之等の鳥の將來も餘り豊かでない事と推察される。

十數年前のこと、奥村のサミュールと云ふ人がある日カヌーに乗つた儘數日を漂流して流れ着いたのが此島である。辛うじて上陸し、先づ飢渴を醫したものはオホアジサシの卵で、其後幾日かして附近を通る漁船に出會ふ迄は、此鳥や卵を手獲りとしてロビンソンのやうな生活をしたさうである。

サミュール氏から當時の話をきくと、三日目位からもうカヌーに横はつた儘起きあがる氣力もなく、六月の熱帯を照らす灼熱の太陽の下で、唯カヌーの流れるのに委せてゐた。ある日カヌーのウケ(カヌーの片方に突出した細長い浮き)を嚙る鱗があり、此時ばかりは身を縮めて船底に蹲まつたさうである。

又ある日、カヌーの艦にとまつた一羽の白い鳥、サミュール氏は立つ力もなくなつた體をいざらして此島に近づき、満身の力を出し辛うじて捕へた白い鳥を、唯夢中で口中に運び、羽毛ごと食べてしまつたと云ふ。この白い鳥と云ふのが私の考へではオホアジサシで、此時は既に西之島へカヌーは近づいてゐたに違ひないと思つた。

アハウドリ

此鳥にして此名稱は眞に不幸なめぐり合せである。又學名で *Diomedea* と云ふのもやはり馬鹿といふ意味を含んでゐる。此鳥にして何故に此名稱を得たか、之は全く動作の緩漫から來たことであらう。海洋鳥類の中で最大、翼長五六〇耗と云ふ大形の鳥であるから、地上に在つては勢

ひ動作は緩漫にならざるを得ないのであらう。翼は長大であるために浮揚した以上、飛翔力は他鳥の比ではないが、元來身體の割に翼長の過大な鳥で、いざ飛翔する場合は必ず多少の滑走を必要とする。このことはアマツバメの章でも記述したが、かう云ふ鳥が一旦地上に降下したら、上空に飛び上るには可成りの努力を要するのである。

アマツバメ等は脚が発達してゐないので、飛翔前の滑走は出来ないが、アハウドリはアマツバメにくらべたらその脚は可成り発達してゐて、平坦な地面であればわづかな滑走で飛翔にうつり得るであらうが、少し地勢の悪い場所等では滑走が出来ないで、たゞ呆然と敵のなす儘になる場合がある。

人は之を見て愚な鳥と觀たのだらう。併し一旦地上を離れて空中のものとなれば、その形はソアラの如く、圓滑そのものの飛翔で、左右一直線に擴げた兩翼は上昇の折僅かに動かす他、大概グライダーの様に長い滑翔を續けてゐる。

私はある夏、北千島のオンネコタン海峡附近で、吹きすさむ海上を恰も嘲弄するかのやうに大様にジグザグ飛翔をやつてゐるのを見たが、如何にも此鳥は大洋に棲む鳥と云ふ感を深くした。此時は恐らくアハウドリとして最北端の渡りであつたらうと思ふ。

アハウドリのことを「シロブ」、クロアシアハウドリは「クロブ」と稱し、此他に最近になつて鳥島で蕃殖するやうになつたコアハウドリがある。シロブは日本南部の海洋中の孤島で蕃殖する他、最近我が軍が占領したウェイク島(大鳥島)に居る。クロブの方も分布は大體シロブに似てゐるが、ハワイの方にはシロブより多く蕃殖する。

コアハウドリは元々ハワイに多い鳥であつたが最近になつて、鳥島へ來て蕃殖するやうになつたと云ふ珍客である。此鳥等の變つたところは、産卵が冬季中、十一月から十二月中であること。考へると一寸變に思ふが、抱卵にも育雛にも非常に長期間を要するので、雛が成長して獨りで大洋を乗り切るやうになる迄には、やはり翌年の初夏、五、六月頃迄かゝるのである。南半球の濠洲方面の夏に蕃殖して、又北半球の夏に慕ひ來るハシボソミヅナギドリやハヒイロミヅナギドリとは多少意味が異なるところである。

私は不幸にして、鳥島へは二度とも上陸出來ず、小笠原列島中の北之島では遙かにシロブ、クロブの姿を見ただけで、その巢を親しく見ることが出來なかつた。平地に僅かの凹所を造つて一卵を産む、之は人が近づくと嘴をパク／＼と鳴らして威嚇するさうである。

奥村のナアティがこんな話をした。その巢の側にはよく小石を見つけることがある。之は「バラ

ストーン」と云つてアハウドリが吐出したものであると云ふ。よく聞くと「バラストン」はBallast stoneの意で、飛翔するのに體の均衡をはかる爲に態々呑込むのであつて、これ等の石は南海では見られぬ「北の石」だと云つた。或はバランスのためでは無く、嚙嚙中で食物の消化を助けるものではないかと考へられるけれども、それは穀類を食ふ鳥のことであるから、やはりナァティの云ふのが本當かも知れない。兎に角面白い話で、何かの機會にアハウドリの巢を見ることが出来たら、此「北の石」を探して見たいと思ふ。

南島と東島

二度目に小笠原島へ渡つたときは先の冬の海にひきかへて、初夏の香り高い静かな海であつた。私はカヌーに乗せられて南島へ向つた。カヌーを操る人は奥村の若者、兄のナァティ、弟のモ一セ、その弟のスワニーもついて來た。港外へ出る迄は、杓文字のやうな權で二人の若者はカヌーの兩側を漕いだが、狭い港の入口を出ると、カヌーは白い三角形の帆を上げて滑り出した。太陽は強烈な眞夏の光、帆陰に身を避けなければ焼かれるやうな暑さである。南島は父島の南、X 渾も行つた所にある小島で、ヲサドリやミヅナギドリ類の蕃殖場である。

先を急がぬ船遊びのこととて、時折カヌーを停止して魚や章魚を釣る。又若者たちは潜りをやつて海底の獲物を探す。薦められる儘に艇外に腰を曲げて槽の底にガラスを着けた「覗き」で海底を見た。水は十數米の下迄青々と透し見られて、白い珊瑚礁の間に動く見なれぬ多彩の魚類、此未知の世界を瞥見して私はすっかり魅惑されてしまった。と、舳の方で「ピュー」と口笛の音がする。ふりかへつて見るとナァティがダイヴィングの前の深呼吸をしてゐるところだつた。

「覗き」をあてた儘、海中を見まもつてゐると、眞珠のやうな氣泡に包まれた蒼白いナァティの體が海底に向けて降りて行つた。一尋、三尋、四尋、ナァティの體が人形のやうに小さくなつたとき、ある大きな珊瑚礁の陰からツと逃れ出ようとした大きな海老、ナァティが手に持つてゐた鈎かぎですばやく引つけてその儘水面へ上つて來た。

よく晴れた上空をヲサドリが滑翔してゐる。何んのわだかまりもなく悠々と弧形を描き、ジグザグに滑り、そのとたん、落石のやうに海面へ飛び込んで魚を捕つてゐる。又巧みなダイヴィングをやる。此島は七、八尋も深く潜るさうである。ヲサドリは標準和名でカツヲドリと稱されるが、此地方ではヲナガミヅナギドリのことを一般にカツヲドリと呼んで、本當のカツヲドリのことをヲサドリと云ふ。

フサドリは歐洲に棲む Gannet に近い鳥であるが、ガネットは眞白なのに比べて、フサドリは ^{ブラウン} Brown gannet と稱される如く、頭部から背面は黒褐色、腹部だけ白色である。分布は主として太平洋の中部、西部に多く、本邦では小笠原島、硫黄島が蕃殖地である。

風の都合でカヌーを南島の西側の入江に着けた。島は白い砂、蒼い草、陽をうけて眼も痛むばかりに輝く。海鳥たちの蕃殖場は西側の崖上で、そこは熔岩から成る鋸齒状に起伏の激しい所だ。フサドリの營巢地へ行つて見たが、丁度營巢にかゝつたばかりで、崖上の平所に徑三十廻程の僅かな凹みを造り、枯枝や草を少し集めてゐた。卵は一箇乃至三箇を産むのが五月から六月に見られる。稍々青味を帯びた細長い物で、鵝の卵によく似た卵である。

起伏した熔岩の間には所々、深さ一米前後の洞穴が自然に出来てゐて、之がヲナガミヅナギドリの巢穴になつてゐる。私たちが歩いてゐると、丁度足の下で變な聲がした。人間の赤ん坊が泣くやうにも、又猫が怒つたときに唸る聲にも似てゐる。それは決して快い聲ではない。若し之を知らないで突然聽いた人は、その怪奇さをきつと無氣味に感じるであらう。穴を覗いて見ると暗い中に蹲まつてゐる一羽の白い鳥の姿、ヲナガミヅナギドリが穴の中で鳴いてゐるのである。

又少し先の洞穴の前には雌雄と想はれる二羽の鳥が蹠んで快い太陽の光を浴びてゐる。寫眞を撮つた後、穴の中へ逃げ込んだ二羽を手獲りにした。恐ろしい嘴の力で、お尻を噛みつかれたスワニーは悲鳴をあげてゐた。未だ卵は無く、此鳥も營巢中であつた。自然の洞穴や岩石の間隙等を利用するものは大した工事は要しないが、岩石の全く無い草の斜面等を選ぶときは、穴を穿たなければならぬ。それは約一米位か、もう少し深く掘り穿つのである。

「四月五月は穴浚ひ……」

と云ふやうな、此カツヲドリに因んだ歌があるとナァティが云ふので、後でその歌を知つてゐると云ふ奥村のデーに聞いたがデーも忘れてしまつてゐた。兎に角、三月下旬から四月にかけて來島、五月中は營巢、六月乃至七月は産卵すると云ふ順序である。卵は白く色も形も鶏卵によく似たもので、ただ一箇を産む。

此崖の東側は又小さな入江になつて、穩かに春の水を湛へてゐる。水着を持つて來たから海水浴をしようじやあないかと私が云ひ出したら、若者たちは眼を丸くしてあれを見なさいと指示した。はるか眼下に見下す入江の、青々と澱んだ水になんだか黒い大きな魚が五六尾静々と泳いでゐて、時々三角定規を立てたやうな脊鰭を水面に出す。あれは皆鱈だと云ふ。此入江の深所に産

卵に來たのであつた。

東島を訪れたのはそれから三日程してある風の日であつた。早朝のうち風でも、時間が経つにつれ風が出て來て、島へ上陸するのも辛つとであつた。此島は南島とは全く感じの異なる島で、全島は餘り險しくない山で、タコノキや萱が密生してゐた。ここにもヲナガミヅナギドリの巢があるが、岩石の下を利用したものが多く、中には山の斜面に横穴を穿つたものが澤山あつた。よく茂つたタコノキ林の中の斜面などは良い營巢場に成つてゐる。こゝでも草の下に蹲まつてゐる鳥は幾羽でも手獲りにされた。

シロハラミヅナギドリの巢穴も此タコノキ林の斜面に在つた。體なりに、ヲナガミヅナギドリに較べて巢穴も小さいから直に區別がつく。シロハラの方もヲナガと同様に小笠原島ではカツラドリと稱されてゐるが、硫黄島へ行くと兩者をちやんと區別して、形の大きいヲナガを「オオマ」又は「オオマトリ」と呼び、シロハラの方を「コマ」又は「コマトリ」と呼ぶ。又此等の中間に「チュウマ」と云はれるのはヲガサハラミヅナギドリのことであるが、此鳥は小笠原島では蕃殖しないで主に硫黄島の地方の鳥である。又「コチョウ」と呼ばれるクロウミツバメも「ボー

スン」の名のあるアカヲネツタイテウも硫黄島以南の島々が産地である。

コマはオオマに比して稍々小さく、色は黒灰色の背に腹部は白、オオマは淡褐色の背部に腹部はやはり白。コマはオオマより産卵期はずつと早く三月中に産み終り、四月には既に雛となつて海へ出てしまふ。悪い時は悪いもので、私はコマの既に去つた後の、そしてオオマが未だ産卵しない時季に出會つて、たうとう自然の儘で之等の卵を一箇も見ることが出来なかつた。

イソヒヨの巢は私達が上陸した箇所の岩壁に在つた。モーセは毎年こゝに營巢するのだと云ふ。餘り高くない所で、少し背延びすると巢の中が見える。綺麗に出来上つた巢の底には青い卵の殻が散ばつてゐた。又蟹にやられたのだとモーセが云ふ。此邊に多いツノメガニや其他の蟹がイソヒヨの巢を襲撃するのである。蟹が鳥の卵を食ふと云ふ話は餘り他では聞いたことが無い。

山の端に生えてゐる珍しいオホハマヲモトを撮影してゐると、獨りカメラに残つて我々を待つてゐたナァティが頻りに呼ばはる。波が出て來たから早く歸れと云ふのである。ザワ／＼と鳴る岩間へ靜かにカメラを寄せて見たが危険で駄目だ。荷物の始末は若者たちに頼んで私とスワニーは裸になつて泳いだ。後で、槽を利用して荷物はモーセが何回にも運んでくれた。

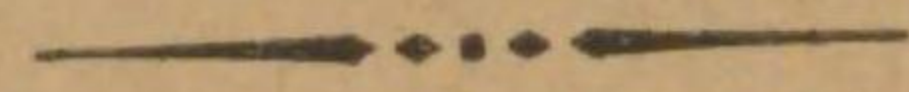
ワ
ワタリガラス 93

ヲ
ヲガサハラウグヒス 179, 187
ヲガサハラヒヨドリ 179

索引

引

ヲガサハラミヅナギドリ 200
ヲサドリ 190, 197
ヲジロワシ 101
ヲナガガモ 58
ヲナガミヅナギドリ 197
ヲバシギ(コヲバシギ) 96



私たちが山へ行つてゐるうち、大きな鯨がカメラの近くに浮び上つてしばらく遊びでゐたさうである。惜しいことをしたと私は思った。

キ
 キジバト(リウキウ) 148
 キセキレイ 142
 キビタキ(アマミ) 144

ク
 クロアジアハウドリ 184, 195
 クロアジサシ 192
 クロウミツバメ 200
 クロガモ 53

ケ
 ケアシノスリ 32

コ
 コガモ 59
 コゲラ(アマミ) 147
 コノハヅク(リウキウ) 147, 160
 コホリガモ 60
 コマドリ(タネコマ) 114
 コムクドリ 142
 コヲバシギ 96

サ
 サシバ 148
 サンセウクビ(リウキウ) 143
 サンコウテウ(リウキウ) 144

シ
 シジフカラ(アマミ) 143
 シジフガラガン 65
 シノリガモ 68
 シマセンニウ 65

シロエリオホハム 49
 シロハラタウヅクカモメ 29
 シロハラミヅナギドリ 200

ス
 スズメ 142

セ
 セツカ 144
 センニウ(ウチヤマ) 120
 " (シマ) 65

タ
 タカブシギ 39
 タネコマドリ 114
 タヒバリ 3
 Dunlin(ダンリン) 12

チ
 チシマオホヒバリ 34
 チシマシギ 81
 チシマライテウ 76
 チンチク 127

ツ
 ツノメドリ 91
 ツバメ(リウキウ) 145

ト
 タウヅクカモメ 27
 トラツグミ(オホトラツグミ) 145

ネ
 ネットアイテウ(アカヲ) 201

ノ
 ノゴマ(オホノゴマ) 73

ハ
 ハギマシヨ 82
 ハクセキレイ 97
 ハシプトウミガラス 103
 ハシボソミヅナギドリ 99, 107
 ハビイロウミツバメ 61
 ハマシギ 8

ヒ
 ヒクヒナ(リウキウ) 149
 ヒバリシギ 17
 ヒメウ 92
 ヒヨドリ(アマミ) 143
 " (ヲガサハラ) 179

ヘ
 ペニアジサシ 149

ホ
 ボニンメジロ 187

ミ
 ミサゴ 147
 ミヅナギドリ(シロハラ) 200
 " (ヲガサハラ) 200
 " (ヲナガ) 197
 ミツユビカモメ 86
 ミフウヅラ 149

ム

ムシクビ(オホムシクビ) 75
 ムネアカタヒバリ 24

メ
 メグロ 188
 メジロ(シチトウ) 186
 " (ボニン) 187
 " (リウキウ) 142
 メボソ(イヒジマ) 110

ヤ
 ヤマガラ(アマミ) 143
 " (オーストン) 116
 ヤマシギ(アマミ) 148, 163

ラ
 ライテウ(チシマ) 76

リ
 リウキウアカセウビン 146
 リウキウアラバト 148, 165
 リウキウウグヒス 144
 リウキウカハセミ 146
 リウキウキジバト 148
 リウキウコノハヅク 147, 159
 リウキウサンコウテウ 144
 リウキウサンセウクビ 143
 リウキウツバメ 145
 リウキウハシプトカラス 141
 リウキウヒクヒナ 149
 リウキウメジロ 142

ル
 ルリカケス 141, 150, 168

索引

ア

アカコッコ 117
 アカセウビン(リウキウ) 146
 アカハラ 145
 アカヒゲ 144, 156
 アジサシ(オホアジサシ)
 190, 192
 " (クロアジサシ) 192
 " (ベニ) 149
 アハウドリ 184, 191, 193
 アビ 46
 アマサギ 148
 アマツバメ 132
 アマミキビタキ 144
 アマミコゲラ 147
 アマミシジフカラ 143
 アマミノクロウサギ 141, 158
 アマミヒヨドリ 143
 アマミヤマガラ 143
 アマミヤマシギ 148, 163
 アヲバヅク 147, 161
 アヲバト 165

イ

イツヒ
 イヒジマノグヒス 114
 イヒジマメボソ 110

ウ

ウグヒス(イヒジマ) 114

" (リウキウ) 144
 " (ヲガサハラ) 179
 ウチヤマセンニウ 67, 120
 ウミガラス(ハシプト) 103

エ

エトピリカ 88

オ

オーstonヤマガラ 116
 オーstonゲラ 147
 オホカハラヒハ 71
 オホアジサシ 190, 193
 オホセグロカモメ 84
 オホトラツグミ 145
 オホノゴマ 73
 オホハム(シロエリ) 49
 オホハヤサ 31
 オホヒバリ(チシマ) 34
 オホムシクヒ 75
 オホワシ 101

カ

カツヲドリ 197
 カハセミ(リウキウ) 146
 カハラヒワ(オホカハラヒワ)
 71
 カモメ 82
 カラス(リウキウハシプト)
 141
 " (ワタリガラス) 93
 カラスバト 148
 カンムリウミスズメ 126

索引

索引

(出文協承認)
 (ア 40201號)

<p style="text-align: center;">昭和十七年九月廿五日改訂初版印刷 昭和十七年九月三十日改訂初版發行</p> <p style="text-align: center;">(三〇〇部) 北の鳥南の鳥 改訂版 定價一圓五〇錢</p>	<p style="text-align: center;">著者 下村兼史 発行者 株式会社 三省堂 代表者 龜井豊治 印刷者 株式会社 日本印刷局 代表者 小林浩齊 (會員番號東東二〇九)</p>	<p style="text-align: center;">發行所 株式会社 三省堂 振替東京三一一五五五 大阪市西區阿波座下通二ノ六 配給元 株式会社 三省堂大阪支店 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社</p>
--	---	--

改訂北の鳥

農學博士 石井悌 著

武藏野 昆蟲記

四六判・二八四頁
定價一・六〇 送料・一二

武藏野に棲息する種々の昆蟲について、多年觀察した著者が、或る時は讀物風に或る時は觀察的に描いた好隨筆集である。春夏秋の昆蟲の順に並べてその一生を解説し、人類と昆蟲との關係、昆蟲と動植物の關係を始め、日本各地及支那南洋等に於て見聞した珍しい昆蟲の特殊な習性等を淡々たる筆致を以つて描く。讀物として、また昆蟲の觀察手引として一讀すべき好著である。

三 省 堂 刊

必 携 ! 小 型 觀 察 手 引

石 澤 慈 鳥 著

寫 眞 路 傍 の 昆 蟲

菊半裁判・クローズ裝・二九四頁
定價 二・五〇 送料 一二

昆蟲の卵・幼蟲・繭・蛹・成蟲等約百四十種の生態寫眞二百三十七枚を選んで、春夏秋の昆蟲の順に並べ、一々撮影月日及び撮影地を明記す。簡明な説明に依り、昆蟲一生の經過習性を充分に解説した。附録として昆蟲飼育法の一編を加へ、あらゆる昆蟲生活の完璧なる觀察書たることを確信する。いまや昆蟲採集が青少年間に一種のスポーツとして、また高尚な趣味として行はるる今日絶好の快著である。

三 省 堂 刊

657
234

高濱 虚子 編

改訂 新歳時記

三六判・クロス装九六〇頁・函入
特價 三・三〇 送料 一・六

巨匠虚子が、舊套を捨て専ら作句者本位に編まれた文學的香り高き名篇。解説の句例たる古今の名吟一萬は虚子選名句集でもある。改訂に當り新季題五十、例句千五百を追補、總インデア紙とした。

富安 風生 著

添刪 本位 俳句の作り方

四六判・紙装・二二〇頁
定價 一・二〇 送料 一・二

本書は單なる俳句作法書ではなく、俳句入門書をも兼ね、明快緊密なる説明と正確な教示とに依つて、俳句といふ文學の諸問題に觸れ、初學者を對象とし而も俳句文學の本質を明らかにす。

三 省 堂 刊



停 ¥ 1.50

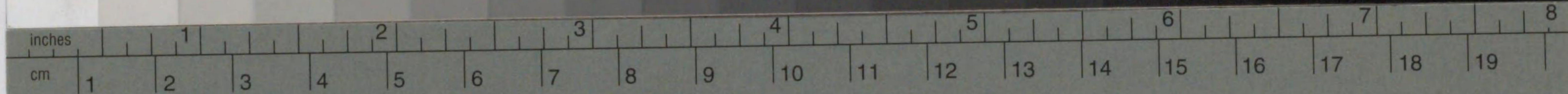
規格 B6判

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

